

第 23 回ショパン国際ピアノコンクール in ASIA オンラインアジア大会(動画審査) 総評 高校生部門

●審査員 A

この部門の演奏をまとめると、皆さん楽器を演奏するという点と暗譜の点で、非常によく準備されていました。プログラムはショパンのエチュードと大曲の組み合わせでしたが、このレパートリーで設定された課題をこなすためには、ショパンの作品解釈に関する知識が不可欠です。

- 1) エチュードでは、楽器を鳴らすことだけに注目するのではなく、アーティキュレーションの豊かさ、音色や旋律の要素に気づくことが重要です。ショパンのペダリングは、技術的な問題だけではない側面を持つよい例です。
- 2) 大規模な作品では、ショパンの異なる活動期における作風の変容を知る必要があるため、問題はより複雑になります。例えばブリランテ様式のロンドにでてくる音の処理や装飾音、ペダリングは、その都度異なっていなければなりません。エキエル版などの原典版と、そこに収録されている貴重な演奏解説を読むことをお勧めします。楽譜の誤読による作曲者の意図を歪めてしまう演奏も見られました。楽譜を真摯に読み込むことでショパンの思想を理解する新しい視野を開き、高貴で崇高な内容と感情に満ちたショパンの音楽の真実と美しさを伝えることができるでしょう。

●審査員 B

まず、新型コロナウイルスの世界的な大流行という大変長く困難な状況下において、伝統ある「第 23 回ショパン国際ピアノコンクール in Asia」を開催することができたのは、皆様のご尽力のおかげであると感謝し、お祝い申し上げたいと思います。確かに平時とは異なる条件ではありましたが、最も重要なことは、このコンクールが開催されたことです。ブラボー！このコンクールは、その芸術的なレベルの高さだけでなく、本選参加者数と開催部門数が非常に多いことでも、長年にわたって注目されています。

私が審査を担当させて頂いた高校・大学部門の芸術的なレベルは総じて非常に高かったのですが、同時に非常に多様でもありました。動画審査では通常、極めて異なる音響条件で録音された音源を聴くことになるので、審査員が完全に客観的な評価を下すことは困難だと感じました。高校生部門と大学生部門の課題曲はほぼ同じだったので、両部門合計 62 名の演奏について、私の全体的な印象を簡単に述べたいと思います。

全体的に、エチュードで発揮されたテクニックは注目に値しました。しかし、ショパンの音楽の解釈の価値は、卓越した技術だけでは成り立たず、また技術とだけ直接結びついているわけでもないということをお覚えておいてください。実際、バラード、スケルツォ、ソナタ、ポロネーズなどでは、耳で聞いても目で見ても重大な解釈の問題にしばしば遭遇しました。

ピアニスティックな技術的困難と格闘しているだけでなく、作品の内容の奥深さをはっきりと理解している解釈には特別な注目と評価が与えられることをここで強調しておきたいと思います。特に注目と評価が高まるのは、楽譜の内容を細部にわたるまで正確に演奏するだけでなく、自分自身の演奏の語り

口（ナレーション）を注意深く聴くことでその才能を発揮し、豊かな創造力と芸術的個性の力を通して聴衆に「この演奏家の解釈をもっと聴きたい」と思わせてくれるような若い音楽家です。しかし、このような印象は、私たちが「才能」と呼ぶものの基本条件である、ある種の芸術的個性を持ったピアニストに接したときのみ得られるものです。そして、長年の努力の末に、「良いピアニスト」は「真の芸術家」へと変身することができるのです。

しかし、多くの場合、若いピアニストは、楽譜に書かれた音符を正しく演奏することを最大の課題と目標としているように思われます。もちろん、そのような姿勢は若い音楽家にとって非常に重要で貴重です。しかし、それだけでは、自分の感情や表現、想像力を効果的に聴衆に伝えるには足りません。私たちピアニストは、常に誰かのために演奏し、楽譜に隠された何かを演奏によって伝えなければなりません。私たちの仕事は、その内容を探し出し、想像力と創造力の結晶である語り口（ナレーション）によって聴衆に伝えることなのです。

フレーズとその構成、メトロノームではなく作品の内容に基づいた滑らかで柔軟性のある語り口、様々なアーティキュレーション、自制と節度のあるアゴギクや強弱、細部までコントロールされたペダルの使い方、曲の形式と和声構造を深く理解することについてなど、解釈を行う上での重要な要素についてはいくらかでも書き続けることができますが、これらの要素は表現の源ではなく、あくまで表現の結果でなければなりません。またこれらはすべて、音楽史、作曲された時代の様式、作曲家の芸術的なスタイルや他の作品についての知識によって、十分に裏付けられたものでなければなりません。

この通り、ピアニストや音楽家という職業は、決して楽なものではありません。幸いなことに、今回私が聴かせて頂いたファイナリストたちの演奏は、指導者の助けと自らの努力によって、期待通りの非常に良い結果を出せる非常に多くの優秀な若者たちがいることをはっきりと示していました。コンクールに参加する重要な目的は、賞をとることではないということを忘れないでください。しかし、コンクールに参加することで、意識的にレパートリーを増やすことができ、具体的な期限までに課題を仕上げるという目標になり、また向上心や集中力を高めることもできます。コンクールは、若い音楽家の成長にとって、大切にポジティブな経験なのです。

末筆ながら、コンクールに参加された皆さん、先生方、保護者の皆さんのご多幸をお祈り申し上げます。子供たちや生徒たちの芸術的な成果を喜びながら、若い皆さんの才能が自然と開花していくことを穏やかに見守りましょう。

●審査員 C

親愛なる参加者の皆様、コンクールでの演奏と、アジア大会への出場権を獲得されたことにお祝い申し上げます。皆さんの演奏をととても楽しく聴かせて頂くとともに、コンクールの準備に費やされた膨大な労力に敬意を払いたいと思います。

アジア大会に参加されたほぼ全員が、非常に高いピアノの技術をお持ちで、綿密に準備されてきたと感じました。皆さんが今後更に芸術的な研鑽を積まれる上で、是非ご検討頂きたい点についていくつか述

べたいと思います。

全ての演奏を聴いてまず思ったのは、曲の内容や感情の深さにもっと関わろうとする姿勢が必要であるということです。皆さん素晴らしいピアノテクニックをお持ちですので、作品をより深く掘り下げ、より細部まで解釈し、「自身が作品をどのように理解していて、音楽を通して何を表現したいのか」を示すことができると思います。ただそのためには、ある程度の創造性と芸術的な想像力が必要です。

もうひとつ重要なのは、音質へのこだわりです。特にフォルテの音量で表情豊かなクライマックスを構築しようとするとき、芯のある音で支えなければなりません。これは自然で適切な方法です。しかし、特にショパンの作品においては、それは決して硬くて耳障りな音ではなく、深くて高貴な音でなければならないのです。音に敏感であるということは、その美しさを追求するだけでなく、多様な音色へのこだわりと、楽器から様々な音色を引き出そうとすることであり、その結果、異なったアーティキュレーションを使用することになります。ショパンが好んで使ったアーティキュレーションは、レガート・カンタービレでした。もうひとつショパンがよく使ったアーティキュレーションは、レグジュエロです。今回のコンクールにおいて、特に歌うようなノクターン、抒情的なバラード、その他舞曲などで、これらの2つのアーティキュレーションは、あまり聴こえてきませんでした。異なったアーティキュレーションや多彩な音色を弾き分けることは、様々な音の層を生み出すと同時に重要な声部を強調し、それらが適切なバランスで聞こえるようにすることです。全ての音が同じように重要であるということは決してありません。ある音が目標であるならば、他の音はその目標へと導く役割があるのです。

また、自然なアゴーギクについても改善の余地があると思います。音楽の中で時間をどのように使うかということは、表情やクライマックスを作り出したり、作品を自然な語り口（ナレーション）で演奏するためにとっても重要です。ショパンの使った、美しくも難しい「テンポ・ルバート」という言葉には、多くのことが含まれています。もちろん、これは「均等」という意味ではありません。自然に表現するために、より深い呼吸、落ち着き、そして時にはせっかちな「ストレット」となることもあります。しかし、これらはどれも、一続きの語り口や長いフレーズを崩さずに奏されなければなりません。

もうひとつ、コンクールでの演奏に関連して触れておきたいのは、楽譜を正しく読むということです。まず1つ目は、強弱、アゴーギク、アーティキュレーション記号を直訳しすぎていることです。スタッカートやアクセントをどのように弾くかということは、曲の内容や性格に大きく左右されることを覚えておいてください。ピアノとフォルテの音量では、アクセントの弾き方も変わってきます。また、叙情的なワルツと生き生きとしたオベレクでは、スタッカートの弾き方も変わります。2つ目は、文字通り、楽譜に書かれている音とリズムを正しく読んで弾くということです。音符の読み間違いで和声が大きく変わり、音楽的な意味も変わってしまっている演奏がありました。今私たちは多くの版や録音に接することができるので、このような初歩的なミスは簡単に確認することができるはずですが、逆に言うところのようなミスは楽譜を表面的にしか読んでいないということを表していると思います。

もちろん、聴衆のいない場所でコンサートの雰囲気もないまま、カメラとマイクに向かって演奏するこ

とは、簡単なことではないでしょう。それでもなお、ピアニストの皆さんが「生」で音楽を創る喜びやインスピレーション、そして自分自身の中にある自発性を見出し、自分の音楽的個性を発見できることをお祈りしています。

●審査員 D

このコンクールは毎年レベルが上がってきています。アジア大会に出られたことだけでも素晴らしいことだと思います。よく練習しましたね。

自分の演奏を録音・録画してチェックすることはとても勉強になると思います。テンポや音量の変化等といった演奏の基本になることから、表現しようと思っていることがきちんと音になっているかどうか、あるいは腕に余計な力が入っていないかなど、自分の演奏を聴いたり見たりして、今後の演奏に役立てていくことはとても勉強になると思います。

演奏技術について、ショパンは「つま先から頭のとっぺんまで楽にする」よう、生徒たちに言っていたようです。演奏する方が硬くなってしまったら、様々な音型に対応することが出来なくなってしまいます。曲を如何ようにも弾きこなし、表現できるようにするためには自分の体を、とりわけ手や指を自由に使い、楽器と一体化することが大切ではないでしょうか。

ショパンの音楽は私たちに様々なインスピレーションやイメージーションを与えてくれます。演奏者は常に耳と心を開き、それらを汲み取り、表現していくことが求められるでしょう。音楽を通じてショパンの心と繋がる事が出来れば、それ以上ない喜びとなることでしょう。

そのためには、今後多くの曲に取り組み、様々な時代の作曲家の作品を勉強することが必要でしょう。そうやって一層大きくなった皆さんの演奏を、また聴けることを楽しみにしています。

これからも頑張ってください!

●審査員 E

対面審査の時と比べて、オンライン審査に向けて取り組まれた皆様は、良い点としては、細部のテクニックのミスに厳しく、練習に取り組んだことが顕著であったことです。

その反面、音楽の自由な表現力が損なわれたことが少し気になりましたが、コロナ禍にめげずに練習に真摯に打ち込んでいる姿勢がどの方にも見られ、音楽を愛する気持ちが伝わる演奏が多く大変嬉しかったです。

●審査員 F

今年はホールでのアジア大会、その約 1 ヶ月後にオンラインアジア大会も開催されました事に指導者としても有難く感謝しております。

高校生の審査の講評に関しましては、レベルの高い演奏が多かったと思いました。その中でも少し惜しい演奏もいくつかありました。あと一步楽譜をしっかりと見て、より深く楽譜を読むことを心掛けることで音楽表現の幅も広がり、ショパンの意図する表現ができるのではないかと思います。テクニック面で素晴らしい方ばかりでしたので、より豊かな表現ができますように期待と応援の気持ちでおります。